

優秀賞

挨拶と「次があるよ」の言葉でつながる街 仰高小学校 田中 悠斗

僕は最近、巣鴨にある自宅から上野駅まで、往復で約十三キロメートルの距離を歩いてみるという遊びをしています。電車を使えばすぐの場所ですが、自分の足で一步步歩いてみると、ふだんは気づかない街の様子が見えてきて面白いからです。

そうやって東京の街を長く歩いていると、いろんな人を見かけます。その中で僕が少しおどろいたのは、道ばたで、突然大きな声でさけんでいる人や、大声で歌を歌いながら歩いている人がいることです。

最初は、怖くて通り過ぎてしまっていました。何度もそんな光景を見るうちに、僕は考えました。あの人たちは、きっと、自分の中にたまっている、言葉にならないような、うっくつとした気持ちを、外に向かってはき出さずにはいられないのではないのでしょうか。

僕が住んでいる東京の街は、いつもたくさんの人であふれています。でも、自分のことでいそがしそうで、となりで歩いている人のことなんか無関心に見えます。誰にも悩みを聞いてもらえなかったり、心の中にいっぱい苦しいことがたまったりして、それがばくはつしそうになって、ああやって大声を出して自分の心を制御しているのではないかと感じるようになりました。

突然大声を出すのは、周りの人をおどろかせてしまうし、良いことではないのかもしれませんが、一人でさけぶだけでその人の心が本当にすっきりするわけではないと思います。僕が考える「明るい社会」は、みんながそんな風にストレスをためこみ、さけばなくてもいいような、互いに挨拶をして気持ちを少しずつ分け合える社会です。

挨拶は、短い言葉ですが、「僕はあなたの存在を分かっています」という合図だと思います。知らない人同士でも、軽く挨拶を交わすだけで、心の中にたまったモヤモヤが少しだけ外ににげていくように感じます。そんな風に誰かとほんの少しでもつながっていると感じられれば、こどくになってしまう人も少なくなるのではないのでしょうか。

僕がそう思ったのには、理由があります。僕はミニバスケットボールのチームに入っています。この前、練習試合のときに、大切な場面でシュートを外してしまったことがありました。僕はすごく落ち込みました。失敗してしまった申し訳なさ、情けない気持ちで胸がいっぱいになって、心の中に、うっくつとした気持ちがたまっていくような感覚でした。

そのとき、チームの仲間たちが「次は絶対入るよ」と大きな声で言ってくれました。

その言葉を聞いたしゅんかん、うっくつとした気持ちが、消えていくのを感じました。失敗を責めるのではなく、次のチャンスを応えんしてくれる仲間がいることがうれしかったです。もしあの時、仲間が失敗を責められていたら、一人でずっと悩み続けていたかもしれません。

この経験は、社会の中でも同じことが言えると、僕は思います。何か失敗をしてしまった人がいても、周りの人が責め続けたら、その人はさらに心を閉ざして、どこかで大きな声を出してしまうかもしれません。

でも、僕がその人に「次は大丈夫だよ」と、声をかけたら、その人はもう一度前を向いてがんばろうと思えるはずです。

今の僕にできることは、一人で悩んでそうな子がいたら、明るく挨拶をし、挨拶をきっかけに、その子

が少しでも悩みを話してくれたら、しっかり話を聞いてあげられるような存在になることです。

一人一人が挨拶をして、誰かの失敗を「次があるよ」と許してあげられるような、そんな優しい東京の街にしていきたいです。